



「親知らず」の生える人と、生えない人がいるのはなぜ

親の知らない歯だから「親知らず」

「親知らず」というのは、口のいちばんおくに生える歯のことで、人間の場合、子どもの歯の乳歯から、大人の歯の永久歯に全部生えかわると、全部で32本あることになっていますが、この中に親知らずも入っています。この歯は生えるのがおそく、16才ごろから生えはじめ、30才くらいで生え終わります。昔は50才くらいで死ぬ人が多かったため、この歯が生えるころには、もう親が死んでいることが多く、それで親を知らない歯、つまり「親知らず」とよばれるようになったということです。

「親知らず」の生えない人がいるのは

歯のはたらきは、食べ物をかみくだくことですが、人間の場合、火を使ってにたり焼いたりして、やわらかくしてかむことがおおくなつて、強い力が必要なくなったため、歯は全体に小さくなり、だんだん退化していくようになりました。そのため、親知らずもなくなりつつあるのです。また、歯と同じように、あごの骨も退化して、小さくなってきているため、親知らずの生える場所が、せまくなっているのです。

このようなわけで、親知らずが全部そろっていれば、上下左右で4本あるわけですが、日本人の場合、この4本がそろっているのは、10人のうち5人くらいだといわれています。（監修・保志 宏）

